

福島県喜多方市 灰塚山古墳第3次発掘調査報告

辻 秀人・横田 竜巳・佐々木拓哉・木村 圭佑
森 千可子・岸 知広・芦野 悟・佐々木雪乃
阿部 大樹・澁谷 若菜・東海林裕也・菅原 里奈
新保 摩実・西川 悠也・廣瀬 琢磨・結城 彩花

調 査 体 制

調査期間	平成 25 年 8 月 5 日～8 月 26 日、9 月 8 日～9 月 11 日
調査主体	東北学院大学文学部歴史学科考古学専攻辻ゼミナール
調査員	佐々木拓哉・横田竜巳（大学院博士課程前期 1 年） 日谷 旭・石橋咲紀・小野寺美聡・菅原健太・高橋萌子・武田翔平・ 名久井伸哉（4 年生） 木村圭佑・森千可子・岸 知広・芦野 悟・阿部大樹・佐々木雪乃・ 澁谷若菜・東海林裕也・菅原里奈・新保摩実・西川悠也・廣瀬琢磨・ 柳沼里美・結城彩花（3 年生）
調査参加者	相川ひとみ・泉澤まい・門脇花珠・木村緋花梨・佐藤愛美・ 鈴木ひかる・鈴木里奈・野呂夕奈・星あゆみ・村木 翔（2 年生） 梅宮崇成・白銀沙也加・鈴木舞香（1 年生）
調査協力	喜多方市教育委員会・東洋興産株式会社・ 山中雄志・片岡 洋・植村泰徳（喜多方市教育委員会）・ 後藤直人（新宮区区長）・田部文市・渡辺和男
土地所有者	新宮区

例 言

- 1、本書は平成 25 年 8 月 5 日～8 月 26 日、9 月 8 日～9 月 11 日実施した福島県喜多方市灰塚山古墳第 3 次発掘調査の報告書である。
- 2、調査は東北学院大学文学部歴史学科考古学専攻辻ゼミナールのゼミ活動の一環として実施したものである。
- 3、調査は東北学院大学文学部教授辻秀人が担当した。調査の主な参加者は考古学ゼミナール所属学生を中心とする東北学院大学文学部歴史学科の学生、考古学実習 I を履修する学生及び参加を希望した歴史学科 1 年生である。
- 4、出土遺物、作成図面の整理は東北学院大学文学部歴史学科考古学ゼミナール所属の 3 年生が中心となって実施した。
- 5、本書の編集は辻秀人が担当し、執筆は参加者が分担した。各項目の執筆者は文末に記した。報告の記載は各執筆の原稿に辻が加筆訂正を行ったものである。従って最終的な文責は辻にある。
- 6、本書に掲載した図面の高さ表示はすべて海拔高、北はすべて真北を示す。

公表された報告書

福島県立博物館 1987 年『古墳測量調査報告』福島県立博物館調査報告第 16 集

辻 秀人他 2012 年「福島県喜多方市灰塚山古墳第 1 次発掘調査報告」『東北学院大学論集 歴史と文化』第 48 号

辻 秀人他 2013 年「福島県喜多方市灰塚山古墳第 2 次発掘調査報告」『東北学院大学論集 歴史と文化』第 49 号

序章 調査の目的

東北学院大学辻ゼミナールでは、東北古墳時代の様相を解明することを目標として活動を継続している。福島県会津地方に多く古墳が分布することはこれまでによく知られてきた。中でも会津盆地東南部の一箕古墳群、東北部の雄国山麓古墳群、西部の宇内青津古墳群は前期の首長墓の系譜を3代以上にわたってたどることができる、有力な古墳群である(辻 2006)。調査の対象とした喜多方市灰塚山古墳は宇内青津古墳群の最も北に位置する前方後円墳である。

灰塚山古墳はこれまで、福島県立博物館によって測量調査が実施され(福島県立博物館1987)、全長60mを超える大型前方後円墳であることが判明している。宇内青津古墳群では亀ヶ森古墳に次ぎ2番目の規模である。古墳の形態も宇内青津古墳群の中ではやや異質であり、最北を占める位置もあってその内容が注目されてきた。ただ、出土遺物が知られておらず、所属時期等についての手がかりがなく、古墳の範囲も測量段階では必ずしも明確にはされていなかった。

これまでに実施した第1,2次調査では、前方部、くびれ部の墳丘構造がほぼ明らかになった。今回の第3次調査では、後円部墳頂にある方形の塚状遺構の全容、性格と、後円部墳丘構造の解明を目的として調査を実施した。

調査は5年間継続する予定で今回は第3回目にあたる。今後は、後円部墳頂平坦面の精査と埋葬施設の検出を目指して調査をすすめる予定である。

引用文献

- 福島県立博物館 1987年 『古墳測量調査報告』福島県立博物館調査報告第16集
辻 秀人 2006年 『東北古墳研究の原点 会津大塚山古墳』新泉社



写真1 調査風景

第1章 古墳の立地

第1節 古墳と周辺の地形

灰塚山古墳は喜多方市慶徳町新宮字小山腰 2908-1 に所在する。会津盆地の西側を画する越後山地の東側の縁辺にあたる丘陵上に所在する。会津盆地の平坦地と西側山地との境界にある丘陵末端部で、周囲を解析された独立丘陵の頂上部分に古墳が築かれている。丘陵を構成する土は七折坂層で、河川の堆積物である砂層、礫を主体とし、火砕流堆積物も含まれる。七折坂層は断層が至近距離にあるため、層位が傾斜している（註1）。

第2節 歴史的環境

灰塚山古墳は会津盆地西部に分布する宇内青津古墳群註の北端に位置する大型前方後円墳である。宇内青津古墳群を構成する主な古墳は前方後円墳12基、前方後方墳3基で会津盆地の平野部から西側丘陵上まで広く分布している。最古段階は会津坂下町杵ガ森古墳、白ガ森古墳で、古墳時代前期でも古い段階にあたる。福島県最大の前方後円墳である亀ヶ森古墳とその横に並ぶ前方後方墳、鎮守森古墳は近年いずれも前期古墳と考えられており、他に森北1号墳、雷神山1号墳、虚空蔵森古墳、出崎山3号墳、7号墳が前期古墳と考えられている。中期、後期になると古墳は減少し、わずかに長井前ノ山古墳が中期、鍛冶山4号墳が後期と考えられている。天神免古墳は前期または中期で所属時期が確定していない。

ところで、近年喜多方市古屋敷遺跡が発掘調査の結果、中期後半の豪族居館であることが判明し、国の史跡に指定された。古屋敷遺跡に拠点をおいた首長の墓は当然宇内青津古墳群中にあるのが自然である。現在その候補として古屋敷遺跡に近い天神免遺跡、虚空蔵森古墳、灰塚山古墳が考えられている。いずれの古墳も未調査で築造時期が確定せず、古屋敷遺跡と対応する古墳は確定していない。

灰塚山古墳の立地する独立丘陵は、国指定史跡新宮城跡と接し、すぐ西側にあたる。新宮城跡は中世の城館跡であり、中心部分はよくその本来の姿をとどめている。その中心は14世紀にあり、15世紀まで存続したと考えられている。灰塚山古墳は新宮城から西側を見たときに、最も近い丘として目に入る位置にある。灰塚山古墳の位置に新宮氏の墓所が想定されており、中世においての何らかの意味をもち、使われた可能性もある。

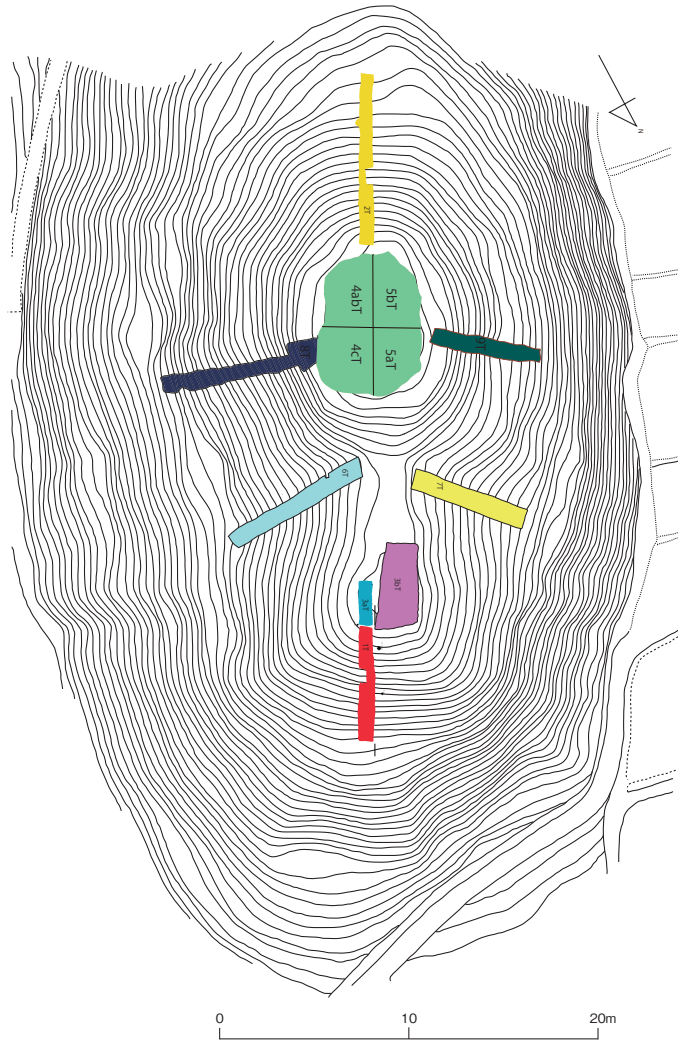
註1 福島県立博物館竹谷陽二郎氏のご教示による。



第1図 宇内青津古墳群分布図

第2章 発掘調査成果

今年度の調査は後円部墳頂で確認されている塚状遺構の全容を把握し、その性格を解明することと、後円部墳丘構造の解明を目的としたため、後円部墳頂北西側 5a 区と、後円部墳頂南東側 4a、b 区を掘り下げるとともに、新たに後円部墳丘東側に第 8 トレンチ、後円部墳丘西側に第 9 トレンチを設定した（第 2 図）。



第2図 トレンチ配置図

第1節 後円部墳頂部の調査

1. 塚状構造物の調査（第3図）

第1次調査、第2次調査（辻他 2012, 2013）により、後円部墳頂に略方形の塚状遺構があることが判明していた。今年度の調査ではまず、昨年度まで観察用に残していた土層断面を記録作成の後に取り払い塚状遺構の全体を露出し、写真撮影を実施し（写真2）、10 cm 等高線による平面図を作成した（第3図）。

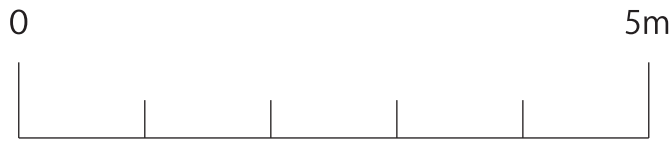
精査の結果、塚状遺構は南東部分に乱れはあったが、1辺8～9 m、高さ60 cm程度の方形の部分と、方形部分の中央に乗る直径3 m前後、高さ40 cm程度の円丘部分とで構成されていることが判明した。円丘部分は、当初付近にあった盗掘坑によって掘り出された土の堆積したものと考えていたが、土層断面観察により、塚状遺構本来の形であると判断された。

塚状遺構の性格を解明するため、南東側の第4トレンチb区と北西側の5a区を層位的に掘り下げた。

塚状遺構を構成する土は大きく見て3層に分かれる。最下層が暗褐色シルト、中層に多量の川原石で構成される礫層、最上層が褐色シルトである（写真3）。掘り下げの段階でシルト層からは須恵器片（第4図）、比較的多くの同一個体火鉢破片（写真7-1、7-2）が出土した。また、中層の川原石からは26点の墨書のある川原石が発見された。出土川原石で墨書が認められるものはごくわずかで、1%前後であった。判読不能な資料も多いが、中に「南無阿弥陀仏」と読めるものがあり、これらが礫石経であることが判明した（写真4、5、6）。従って、これまで塚状構造物としてきた遺構は礫石経塚であると考えられた。経塚造営年代を決める材料は乏しいが、礫石経塚の類例からみて江戸時代に築かれた可能性が高いと考えられる。なお、経塚上面に一部炭が分布していたが、経塚に直接関係するか否か判断できなかった。（佐々木雪乃）



写真2 礫石経塚写真



第3図 礫石経塚全体図

(1/60)



写真3 礫石経塚土層断面写真



礫石NO21-1



礫石NO21-2

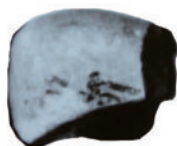
南無阿弥陀仏

信□



礫石NO2

参



礫石NO3

南無阿弥



礫石NO4



礫石NO6

□□
□□
□□



礫石NO7



礫石NO8

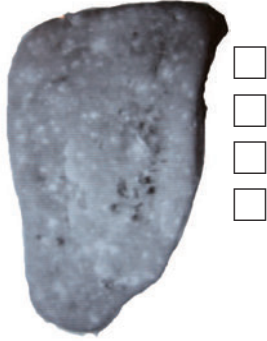
□無阿弥陀?
阿□□□



写真4 墨書礫赤外線写真(1)



礫石NO11



礫石NO12



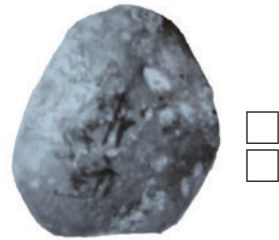
礫石NO13



礫石NO13



礫石NO15



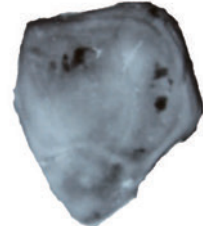
礫石NO16-1



礫石NO16-2



礫石NO18-1



礫石NO18-2



礫石NO19-1



礫石NO19-2

写真5 墨書礫赤外線写真(2)





礫石NO20



礫石NO22



礫石NO23



礫石NO24



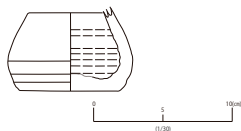
礫石NO25



礫石NO26



写真6 墨書礫赤外線写真(3)



第4図 出土須恵器実測図



写真7-1 須恵器写真



図7-2 火鉢破片

2. 後円部墳頂部の調査（第5、6図）

後円部墳頂平坦面は中央部分から北側がほとんど礫石経塚の下層となっていたため、これまで精査できなかった。しかし、今回の調査で礫石経塚の外側と経塚下層墳頂平坦面で若干の知見を得た。

まず、礫石経塚から外れた墳頂平坦面北端と南橋で黄色粘土ブロックを数か所で検出した。いずれも長さ数10 cm程度で広がりはしなかったが、本来は墳頂平坦面全体を覆っていた可能性がある。宮城県宮崎町大塚森古墳（辻 2008）など東北地方の多くの古墳で墓壙を埋戻した後に墳頂平坦面全体に墳丘と類似した土を乗せて最終的に墳丘を仕上げする例があり、本例も同様に最終的な墳丘仕上げの痕跡とみることができよう。

次に第5aトレンチ、第4aトレンチで墳丘平坦面外縁と内部に土質の違いが認められた（写真8）。土質の違いはさほど大きくなく、さらなる精査を必要とするが、墓壙の外周ラインの一部が検出されている可能性がある。

また、礫石経塚下層の墳頂平坦面中央部分で幅1 m前後南北に延びる黒色土が確認された（写真9）。礫石経塚残存部分の下層に延びているために全体の大きさ、形は未確認だが、その位置、大きさ等から埋葬部分の陥没坑である可能性も考えられた。

今回の墳頂平坦面の調査は礫石経塚の下層にあたるため、限られた面積を対象とするにとどまった。来年度に予定している第4次調査では墳頂平坦面全体を調査し、埋葬部の様相を把握することを目指したい。

（佐々木雪乃）

引用文献

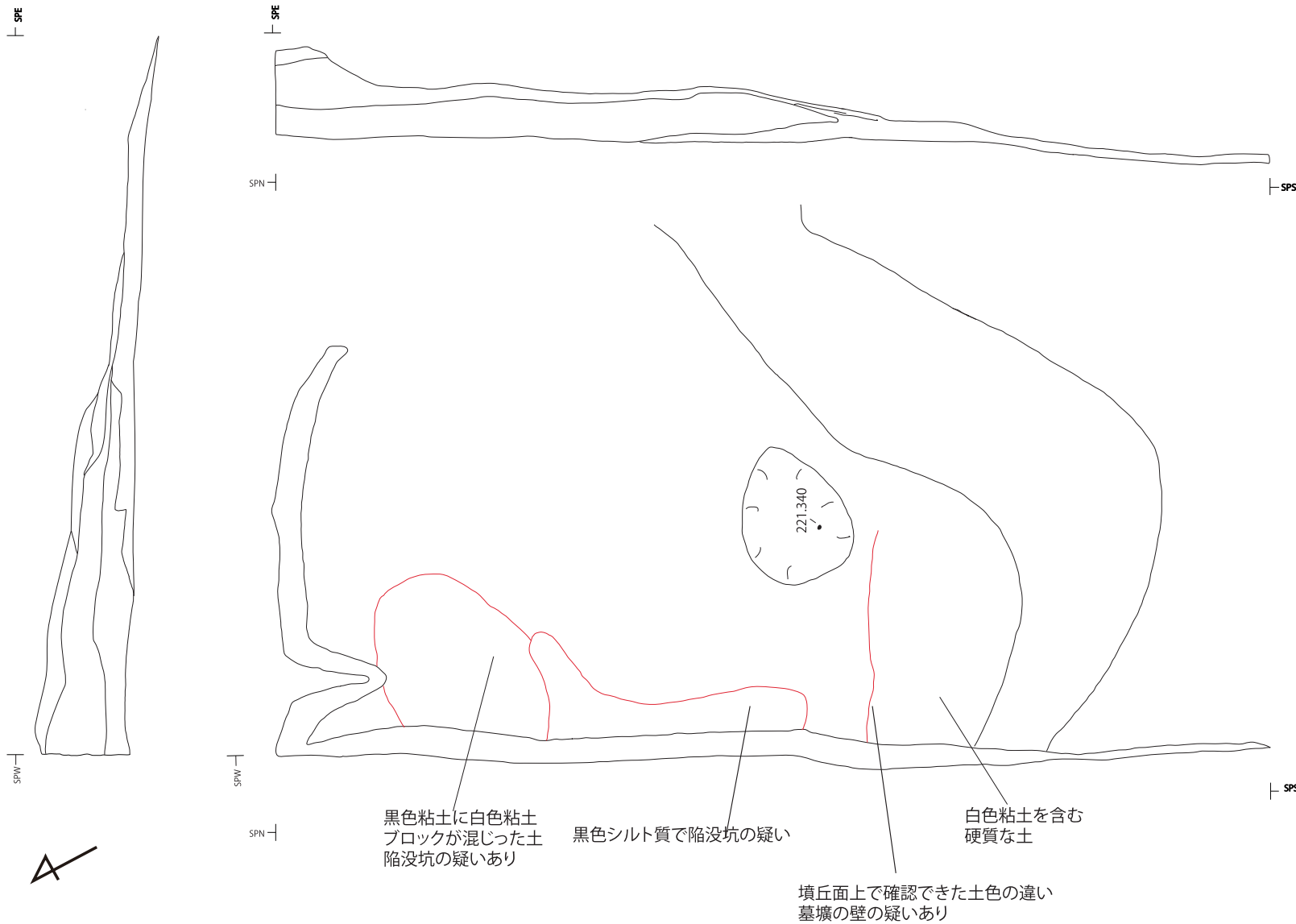
辻 秀人 2008年 「大塚森古墳の研究」『東北学院大学論集 歴史と文化』第43号



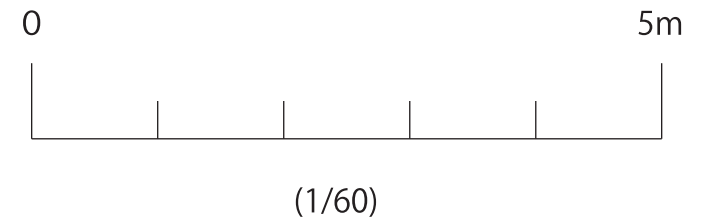
写真8 墳頂平坦面外縁の土質の違い
（墓壙ライン？）



写真9 墳頂平坦面中央部に分布する黒色土
（陥没坑？）



第 5 図 4ab トレンチ平面断面図

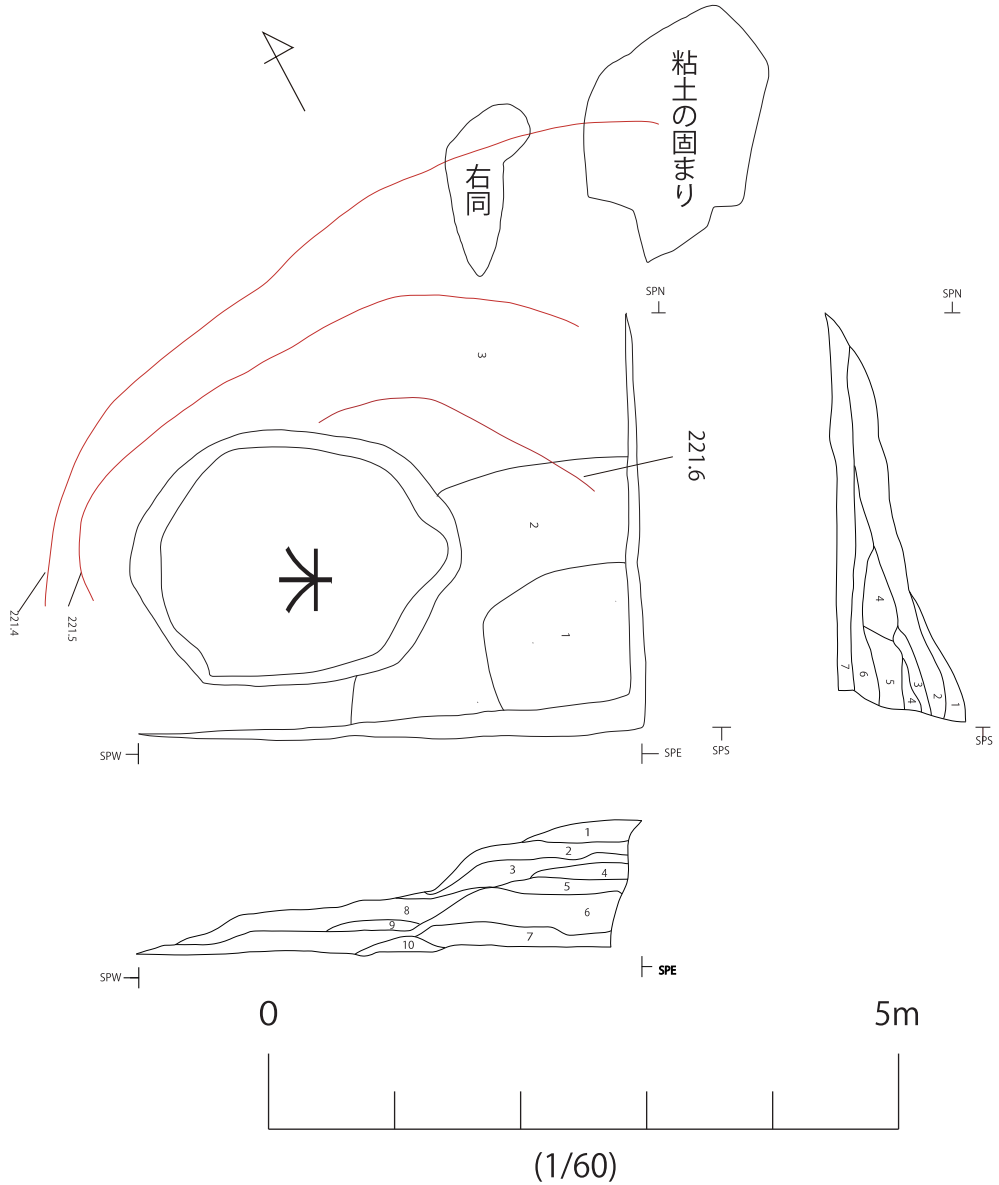


西壁断面図

土層注記		層色	粘性	しまり	粒度	備考
1	Hue	5YR褐灰5/1	弱	弱	シルト	
2	Hue	10YR褐4/4	弱	弱	シルト	
3	Hue	7.5YR褐4/3	弱	弱	礫	礫多数あり
4	Hue	10YR褐4/4	弱	弱	シルト	
5	Hue	5YR暗示褐3/3	弱	弱	シルト	
6	Hue	10YR暗褐3/3	弱	弱	シルト	

北壁断面図

土層注記		層色	粘性	しまり	粒度	備考
1	Hue	5YR褐灰5/1	弱	弱	シルト	
2	Hue	10YR褐4/6	弱	弱	シルト	
3	Hue	7.5YR褐4/3	弱	弱	礫	礫多数あり
4	Hue	10YR黒1.7/1	弱	弱	シルト	
5	Hue	10YR暗示3/3	弱	弱	シルト	



5T東壁断面図

層	土色	粘り	しまり	シルト	備考
1	5YR5/1褐灰	弱	弱	シルト	南壁セク図の層1と同色
2	10YR6/6明黄褐	弱	弱	シルト	南壁セク図の層2と同色
3	10YR3/2黒褐	弱	弱	シルト	南壁セク図の層3と同色
4	2.5Y7/3淡黄	弱	弱	シルト	南壁セク図の層4と同色
5	10YR2/2黒褐	弱	弱	シルト	なし
6	7.5YR4/3褐	弱	弱	シルト	隣多数有(後層) 南壁セク図の層6と同色
7	10YR3/4暗褐	弱	弱	シルト	南壁セク図の層7と同色

5T平面図

層	土色	粘り	しまり	シルト	備考
1	10YR4/4褐	中	中	シルト	2%極小
2	10YR6/6明黄褐	中	中	シルト	7%小
3	10YR8/4淡黄橙	弱	強	シルト	10%小

5T南壁断面図

層	土色	粘り	しまり	シルト	備考
1	5YR5/1褐灰	弱	弱	シルト	東壁セク図層1と同色
2	10YR3/2明黄褐	弱	弱	シルト	東壁セク図層2と同色
3	10YR3/2明黄褐	弱	弱	シルト	東壁セク図層3と同色
4	2.5Y7/3淡黄	弱	弱	シルト	東壁セク図層4と同色
5	2.5Y5/3黄褐	弱	弱	シルト	なし
6	7.5YR4/3褐	弱	弱	シルト	隣多数有り
7	10YR3/4暗褐	弱	弱	シルト	東壁セク図層7と同色
8	10YR7/1灰白	弱	弱	シルト	なし
9	7.5YR7/1暗褐灰	弱	弱	シルト	なし
10	2.5Y7/2灰黄	弱	弱	シルト	なし

第6図 5a トレンチ平面断面図

第2節 後円部墳丘の調査

1. 後円部墳丘東側の調査（第8トレンチ）（第7図）

第8トレンチは後円部東側の墳丘構造の把握と墳端の確認を目的として設定した。トレンチは古墳の主軸に直交し、後円部墳頂平坦面東端より東側に幅1.5m、長さ18mである。

トレンチ内の表土及び墳丘流出土層を掘り下げ、墳丘面を確認した。墳丘面を精査したところ、墳丘面から3層の土層が確認された。層は上層から、(1)褐色の層、(2)明黄褐色の層、(3)にぶい黄褐色の層、からなり、これらの土層はいずれもシルト質で、しまりが弱い。

墳丘斜面の標高206.5～207.25m付近、および204.25m付近斜面東端付近にそれぞれ傾斜の緩やかになる所があり、いずれも不明瞭ではあるが、前者がテラス、後者が墳端と考えられる。また、このテラス付近を境に上部が積み土、下部が地山で構成されている。

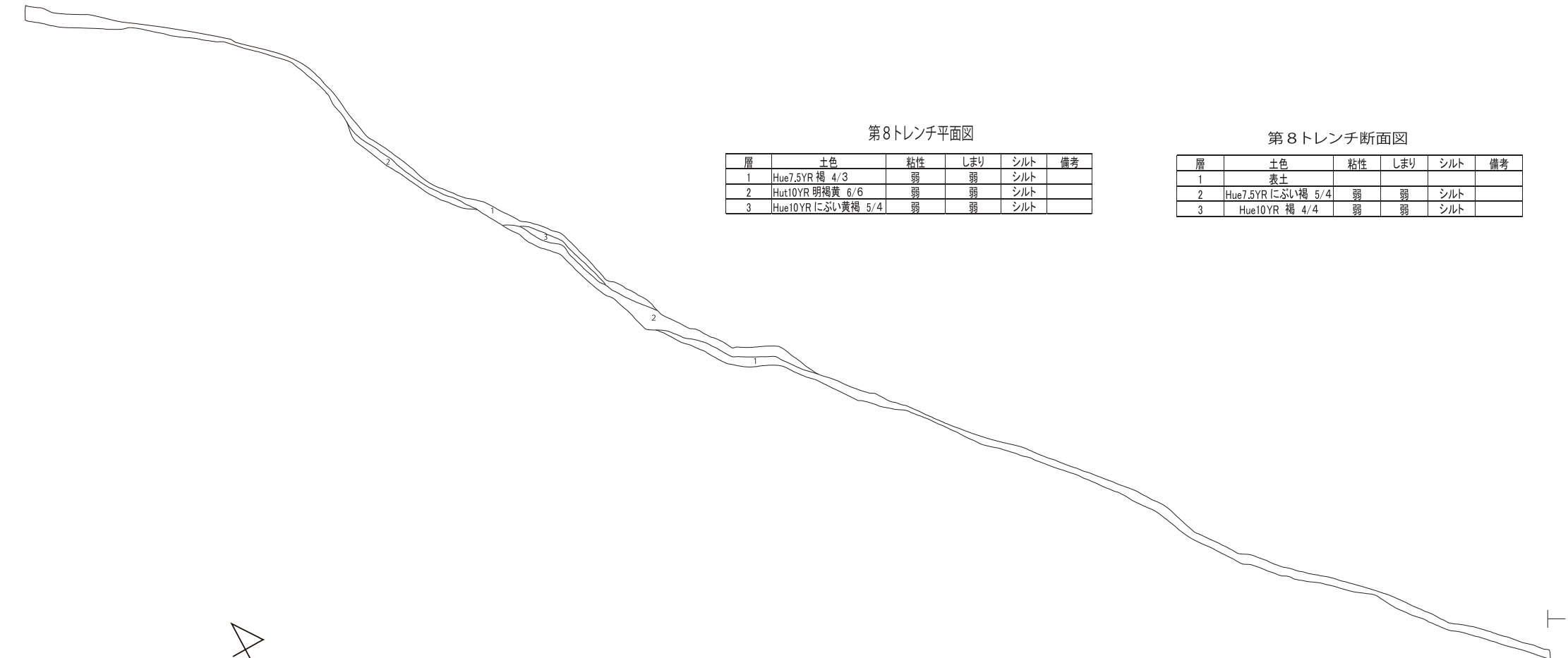
第8トレンチの目的は後円部墳丘面の構造を把握するとともにテラス、墳端の確認であり、今回の調査でその目的を達成することができた。

(芦野 悟)



写真10 第8トレンチ全体写真

SPW

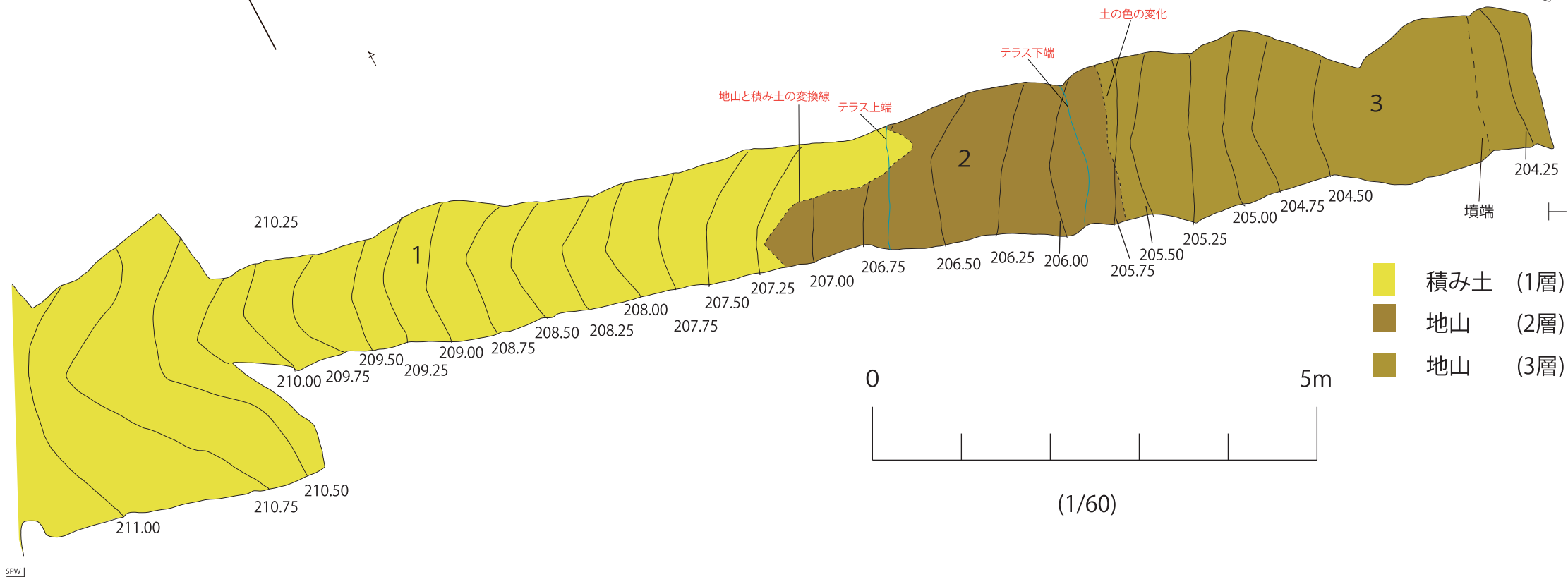


第8トレンチ平面図

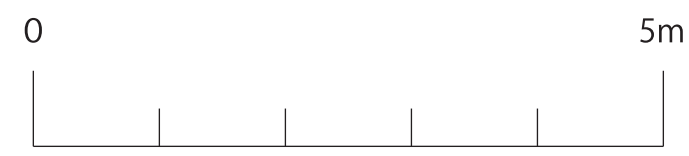
層	土色	粘性	しまり	シルト	備考
1	Hue7.5YR 褐 4/3	弱	弱	シルト	
2	Hue10YR 明褐黄 6/6	弱	弱	シルト	
3	Hue10YR にぶい黄褐 5/4	弱	弱	シルト	

第8トレンチ断面図

層	土色	粘性	しまり	シルト	備考
1	表土				
2	Hue7.5YR にぶい褐 5/4	弱	弱	シルト	
3	Hue10YR 褐 4/4	弱	弱	シルト	



- 積み土 (1層)
- 地山 (2層)
- 地山 (3層)



第7図 第8トレンチ平面、断面図

SPW

2. 後円部墳丘西側の調査（第9トレンチ）（第8図）

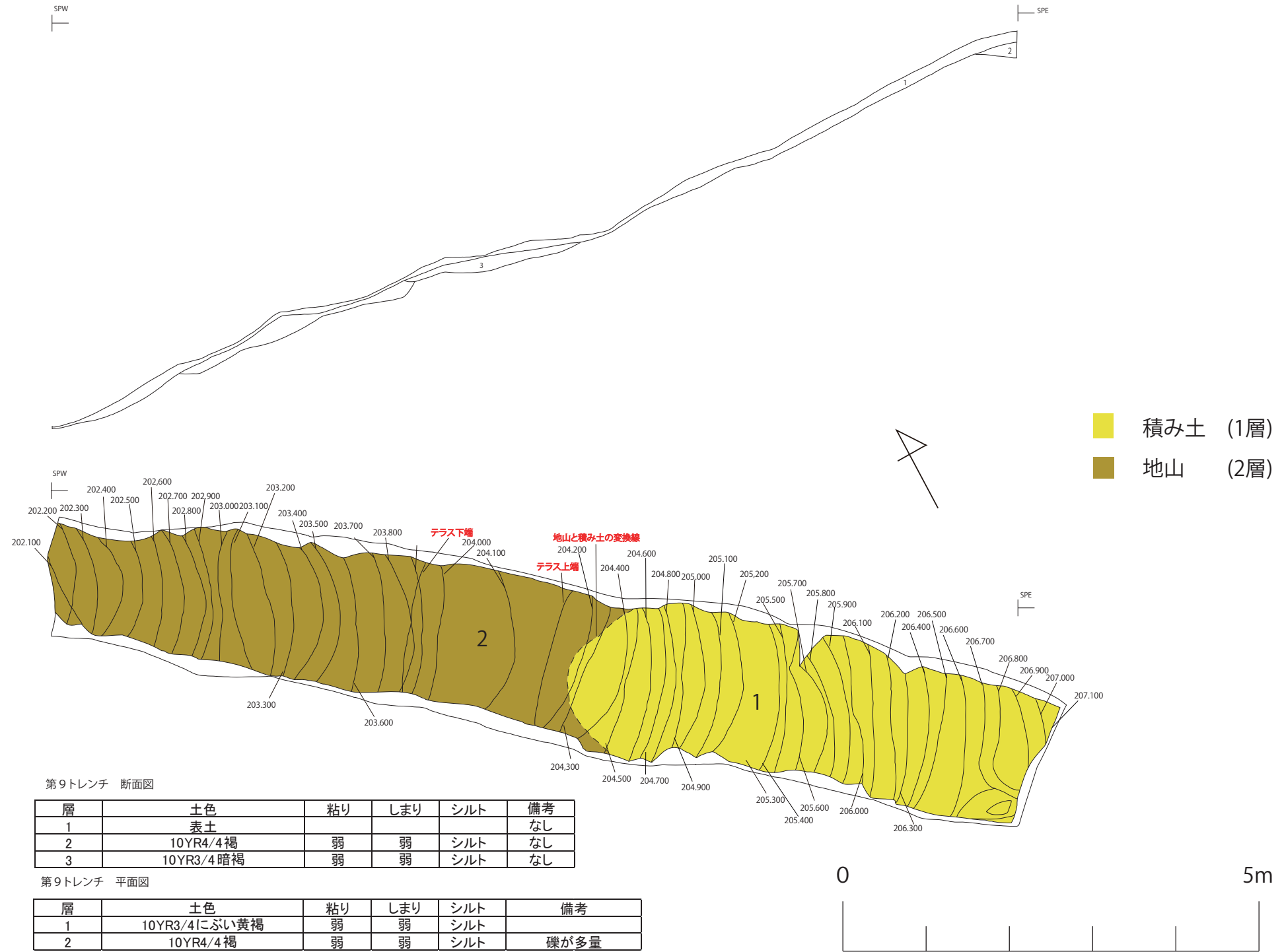
第9トレンチでは墳端の確認とテラスの有無の確認、積み土と地山の違いを確認することを目的として設定した。トレンチは後円部西側に設定し、幅2m、長さ12.20mである。

トレンチ内の表土及び墳丘流出土層を掘り下げ、墳丘面を確認した。墳丘面を精査したところ、墳丘面は2層の土層が確認できた。明らかになった土層は、テラスから上部に（1）にぶい黄褐色の層、テラス部より下にかけて（2）褐色で礫が多い層の2層である。（1）層は混在したシルト層なため、積み土と判断した。（2）層は礫を多く含んでいることから地山であると判断した。従って9トレンチの墳丘は地山を削るとともに、削られた土を積み上げることで作られていることが判明し、トレンチ内で標高204.5m付近で傾斜がゆるやかになり、テラスと考えられた。墳端は今回設定したトレンチの範囲には存在しないようで、何度かテラス終わりを拡張してみたが、崖に接してしまって確認することが出来なかったものの、図面からトレンチ終わりの崖に接したところで傾斜が著しく変化していることから、崖部分が、墳端の可能性が高いと判断した。

（菅原里奈）



写真11 第9トレンチ全体写真



第9トレンチ 断面図

層	土色	粘り	しまり	シルト	備考
1	表土				なし
2	10YR4/4 褐	弱	弱	シルト	なし
3	10YR3/4 暗褐	弱	弱	シルト	なし

第9トレンチ 平面図

層	土色	粘り	しまり	シルト	備考
1	10YR3/4にぶい黄褐	弱	弱	シルト	
2	10YR4/4 褐	弱	弱	シルト	礫が多量

(1/60)

第8図 第9トレンチ平面、断面図

ま と め

灰塚山古墳第3次調査は、第1次調査に引き続いて後円部墳丘構造を明らかにすることと、第2次調査までで確認していた後円部墳頂上に存在する小礫を多量に含む塚状遺構の性格を明らかにすることを目的として実施した。

後円部墳丘構造を探求するために、後円部墳丘東西方向に第8、第9の2本のトレンチを設定した。

第8トレンチでは標高206.5～207.25 m、第9トレンチでは標高204.5 m付近で明瞭な墳端を確認した。これまでに明らかになった前方部、後円部の墳丘構造と同様に墳端付近の墳丘は地山で構成されていた。灰塚山古墳墳丘端は地山を削りだして形成されていることが今回の調査でも確認できた。

第8、9トレンチのいずれでも傾斜が緩やかになる部分が確認された。第1次調査第1トレンチ、第2次調査第6、7トレンチでも同様の位置に傾斜が緩やかになる部分が認められ、テラスである可能性が考えられた。第3次調査を含めて、後円部墳丘の東、西、南の3方向、および東西のくびれ部で同様の傾斜変換が認められることから、これらはテラスとして意識的に作り出されており、灰塚山古墳後円部は二段構成であることが判明した。また、墳丘は、テラス部分を境に下部は地山削りだしで、上部は盛り土で形成されていることが確認できた。

後円部墳頂の塚状遺構はこれまで東西南北の部分ごとに調査を実施してきた。今回の調査では、まず塚状遺構の全体を検出し、図面、写真による記録を作成した後に四分法に従い、南東部と北西部を掘り下げた。

調査の結果塚状遺構は上下の二段で構成されていることが判明した。下段は、後世の変形があってやや形に乱れがあるが、おおむね一辺10 m前後、高さ60 cm程度の方形を呈しており、塚はシルト質の土層と小礫だけで構成される層、土層を交互に積み重ねて作られている。上段は直径6 m、高さ50 cm程度の小さな円丘である。調査以前には近くにある攪乱穴を掘りあげたものかと考えたが、土層断面観察結果から塚本来の形状であることを確認した。

調査の結果塚状遺構は、古墳時代の上円下方墳に類似した形態であることが判明した。南東部、北西部の掘り下げの結果、多量の礫の中に墨書されたものを発見した。礫は多量であるが水洗の結果墨書のあるものは1%に満たないと考えられた。墨書の内容は断片的で不明なものが多いが「南無阿弥陀仏」と読めるものがあり、礫石経であることが確認できた。つまり、灰塚山古墳後円部墳頂の上円下方形の塚は礫石経塚と考えられた。築かれた時代は古墳の時代よりもはるかに新しく、江戸時代と考えられた。

礫石経塚の下層が古墳本来の後円部墳頂平坦面にあたる。今回の調査では礫石経塚を掘りあげた南東部、北西部の精査を行った結果、墓壙平面の一部かと思われる土質の違いと

後円部墳頂中心部に南北に長い黒色の土が分布していることを確認している。ただ、礫石経塚の最下層の土を十分には除去できておらず、墳頂平坦面の精査による埋葬施設の追求は、平成26年度に予定している第4次調査の課題である。

(辻 秀人)

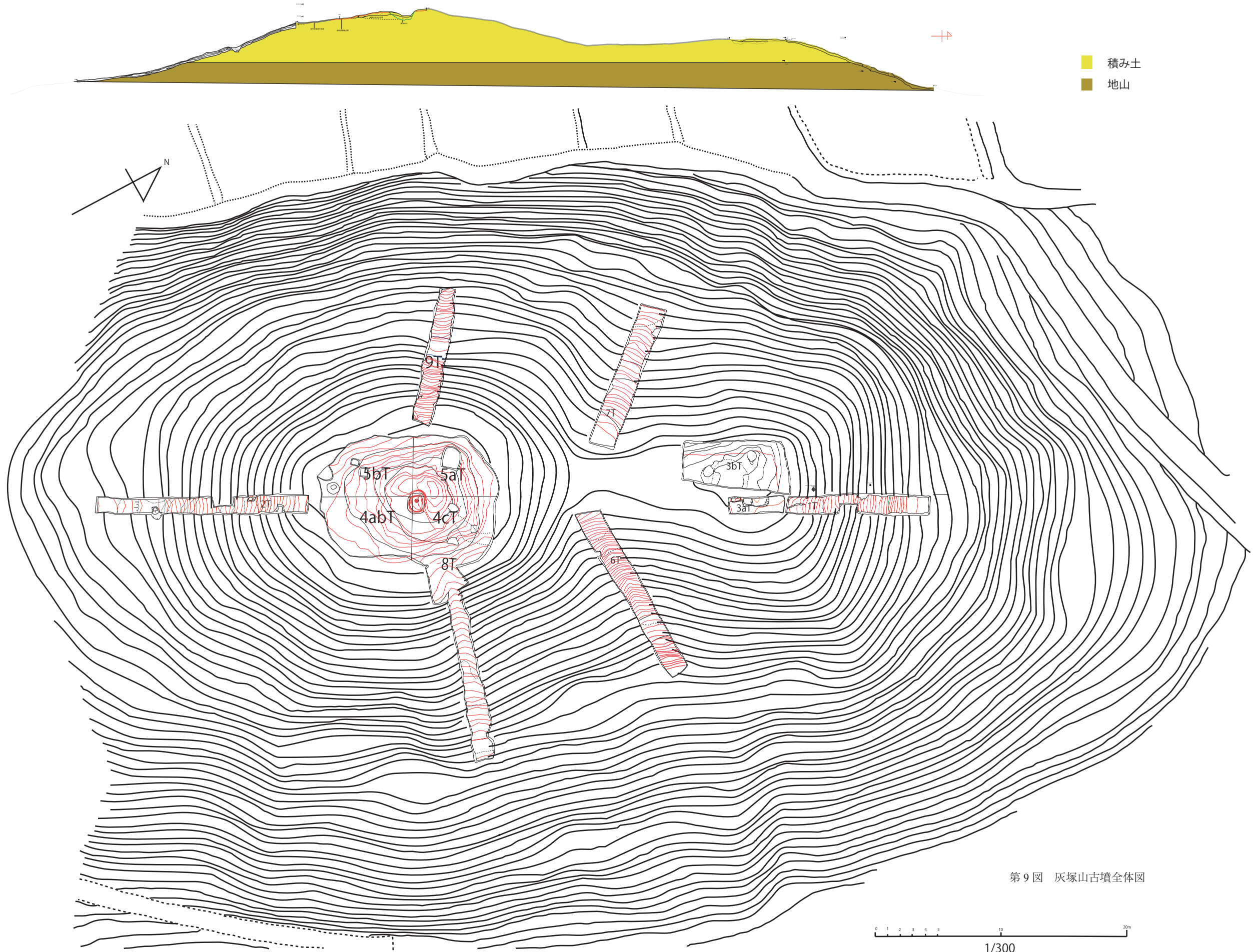
謝 辞

灰塚山古墳第3次調査にあたり、調査を快諾いただきました新宮区の皆様に心より感謝申し上げます。また、調査の実施にあたり御支援いただきました喜多方市教育委員会、山中雄志氏、片岡洋氏、植村泰徳氏、土地を借用させていただきました佐藤光子氏、宿舎を提供いただきました矢部善兵衛氏に御礼申し上げます。本報告作製にあたり、礫石経の赤外線による調査で東北歴史博物館及び東北歴史博物館保存科学担当及川規氏にお世話になりました。文字の解読で本学菊池慶子教授・七海雅人教授に貴重な御教示をいただきました。心より感謝申し上げます。



調査風景





積み土
地山

第9図 灰塚山古墳全体図

0 1 2 3 4 5 10 20m
1/300